

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	比較文明学	専攻		
研究代表者 (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科比較文明学専攻 博士後期課程一年		丸山 諒士 印				
指導教員	所属・職名		氏名				
	立教大学文学部・教授		佐々木一也 印				
自然・人文・社会の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
研究課題	ライプニッツ哲学における無限・偶然性の彼の最善世界説を踏まえた現代的意義の考察						
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科比較文明学専攻博士後期課程一年		丸山諒士				
研究期間	2016 年度						
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 185,324 円 / (採択金額) 200,000 円						

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は筆者がこれまで行ってきたライプニッツ哲学における抽象的な位相での無限論(特に神や数ではなく世界の無限についての無限論)が、彼の思想の実践的背景であったキリスト教信仰と理性との折衷においてどのような地位を占めるのかを探求し、更にその成果から彼の哲学の現代的意義を模索することを目的とする。このためにまずライプニッツの主著である『弁神論』を彼の無限論の観点を踏まえて精読し、ここから神にとっての最善と人間にとっての善との繋がり方を考える。その際彼の無限論と不可分の関係にある偶然性に注目することで、解をただ一つに定めるような計算的理性とは異なる、別の rationalism の可能性を現代的意義として考える。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[弁神論] [無限] [ライプニッツ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

最初に本研究の中心を為す『弁神論』の概略を示す。ただしこの書物はテーマが重層的で、繰り返しや脱線が非常に多く、また同時代人からの引用及びそれに対する反駁も多く含まれるため、弁神論の主要目的に照らし合わせて内容をかなり絞ってこれを行う。

全知全能である神が創造したこの世界に何故悪がはびこるのか、という問いに答えることが『弁神論』におけるライプニッツの基本的な目的である。ライプニッツの回答は大枠で言えば以下の通りである。「この世界の全ての原因は神であるにせよ、そのことはこの世の悪を神が意志したことを意味しない。というのも神は可能なあらゆる世界の中で最善のものを意志し、その最善を実現する上で避けられない悪を許容したに過ぎないのだから。神の全能を持ってすればもちろん全く悪のない世界も可能であっただろう。だが最善として選ばれたこの世界には確かに悪があるのであり、悪を含めたこの世界のあらゆるものが最善なる完全な秩序をもって互いに結びついている以上、この世界からいかなる悪を一つでも抜き去ろうものなら、その世界はこの現実世界とは全く異なるものとなり、従って最善ではなくなる」。つまりライプニッツの考えによれば、神は最善を実現するために悪を許容することを義務付けられている。即ち悪はより大きな善のための支払うべきコストであり、もっと露悪的な言い方をすれば、全宇宙という途方もなく大きい神の計画において、人間の事象において起こる悪など途方もなく小さいということになる——彼はチェリオ・セコンド・キュリオネ (Celio Secondo Curione 1503-69) の物議をかもした書『神の幸福なる王国の宏大さについて』(1554) に言及しながら、これに同意しているように見える。もっとも悪がどれだけ小さいものであろうと、悪が現にあるということ自体が問題である。しかしライプニッツによれば神は悪の産出を意志したのではなく、最善を意志する際の副産物として悪の生ずることを許容しただけなので、悪の起源という罪を免責されるのである。

このようなまとめ方は Théodicée (弁神論の原語にあたるライプニッツの造語) の内——ブランシュヴィックの表現を借りれば——「大胆な意味」である「神の弁護」という側面に重点を置いたものになる。そのためもう一つの「慎重な意味」にあたる「神の正義についての語り」という側面が弱まる。そのせいで、神は免責されるとしても、人間にとって悪は必然であり自由はないのか、だとしたら神の正義とは何か、という疑問が生じることは避けられない。しかしブランシュヴィックが分けた二つの側面は互いに表裏の関係にあるものであるため、概観は一側面にのみ留め、以下の詳述においても一つの側面にも光があたるようにする。

さて、以上の概観を踏まえて研究成果の概要を記述するにあたり 1. 弁神論における無限の位置付け、2. 弁神論における神と人間理性との関係、3. 以上の現代的意義、という 3 つのポイントに分け、それぞれで明らかになったことを明示する。

1. 弁神論における無限の位置付け

本研究で取り扱う無限は、数や神についての無限 (ライプニッツはこれらをそれぞれシンカテゴレマティックな無限、真の無限と呼ぶ) ではなく、「世界が無限である」、「世界は無限の実体からなる」、「物体は現実に無限に分割され得る」という時の無限、即ち世界を構成する被造物に関わる無限である (以下特に他とこれを区別する際には「現実的無限」と呼ぶ)。弁神論においてこの無限は幾度も登場するが、重要なものとして二つを挙げる。A. ホッブズ及びスピノザの絶対的必然主義 (物事は現にあるのとは異なる仕方では存在し得ない) に対抗する場面。(ライプニッツが紹介する) ホッブズによれば「未来に存在しないものについては、そのための必要な条件が全て揃っていない。そして条件の揃わないところにおいて当の未来のものは存在し得ない。従って現に存在しないものは不可能である」。しかしライプニッツの考えでは、条件の揃わないところにおいて当のものが存在し得ないことは確かに真であるが、条件が揃うことを思考し得る以上、この不可能性は仮定的なものに過ぎず、論理的には可能である。彼にとってあるものが可能であること (矛盾律に反さないこと) と、存在すること (最善律に従って創造されること) とは区別される。しかしながらホッブズの立場からするとこの返答は空を切るだろう。何故なら論理的に可能だとしても当のものが存在しないことは現に不可能であるまま (つまり必然) で、彼が思考しているのは後者だからだ。ライプニッツ自身が可能と存在とははっきりと区別したことからして明らかだが、両者は可能/不可能の定義を巡って対立しているに過ぎない。しかし人間 (及び神) の自由を問題にするライプニッツにとって必然主義を避けるためには、定義上の争いで勝利することは空しい。事実ライプニッツは存在をめぐる真なる命題には「偶然的真理」という名を与えているのである。そしてこの偶然的真理の定義を考察することではじめて、必然主義とライプニッツとの対立の実相が見えてくると筆者は考えた。偶然的真理とは有限回数の分析によって証明できないような、つまりその理由遡及が無限に続くために、最後の理由を世界の系列外 (即ち神) に求めざるを得ないような真理である。つまりこの真理の偶然性は単に論理的に可能であることを越えて、論理的に可能であり続ける (理由をどこまでも求めることができる) ことによって帰結しているのである (ただし分析の及ばない最後の理由として神があり、その最善の選択に依存する点で、偶然的真理は道徳的に必然である)。そしてだからこそこの世界の事象を偶然的とすることができ、従って人間の自由を担保できるのである。他方必然主義 (特にスピノザ) にとって、理由遡及の終わらなさは人間の有限性に由来し、従って偶然性は認識上にしかなく、実際には全理由を含み込む無限の全体において全ては必然的であり、人間に自由はない。後者の考え方をライプニッツが受容できないのは無限の全体というものを彼が認められなかったからである。他方スピノザがこれを認められるのは世界をそのまま神と見る視座を持つからだ。従って「可能」をめぐる必然主義とライプニッツの対立を、ライプニッツはその言葉の定義に見ていたようだが、おそらく実質的には両者の無限概念の違いが問題なのである。以上が一つ目である。二つ目はより単純である。B. 世界の宏大さについて述べる場面。A における無限概念が帰結する世界は当然ながら無限に大きいものとなる。そしてこのことからどれだけの悪でもより大きな善のための副産物として考えることが可能になる。ところで B を言うためには、その全体を確定することが不可能であるような意味での無限の位置付け即ち A が必須である。A の内容はやや『弁神論』読解から離れた節があるが、B のためにも避けられない推測であると言える。

2. 弁神論における神と人間理性との関係

研究成果の概要 つづき

この関係に関してもまた大きく分けて二つの側面が見られる。ライプニッツは伝統的なキリスト教の教義(乃至聖書の記述)に従い、人間を「神の似姿」、「小さな神」と呼び、創造主によって特別の恩寵を授かった優位な存在として記述する。とりわけ人間が理性的精神を有することがその徴である。これをA. 人間中心主義的側面と呼ぶ。この側面を考察する上ではライプニッツが『弁神論』の「緒論」において理性を判断の能力ではなく「諸真理の連鎖」と定義していることに注目すべきであると筆者は考えた。何故なら、完全な真理の連鎖は神という完全な理性的精神のみぞ知るものであろうとも(というのもその連鎖は無限であるから)、理性を諸真理の連鎖と定義することによってこそ人間にもそれに接近する可能性を許容しているように思われるからである。また同じく「緒論」においてライプニッツは信仰の真理(啓示が根拠)と理性の真理(証明が根拠)の一致を図っているのだが、その実質は両者の矛盾を指摘する反論に対する無限の弁護である。つまりそもそも論証不可能な信仰の真理の真性は、論証的な反論を論駁していくことにおいてのみ守られるということである。従って信仰の真理は謂わば無限の弁護の先における推定無罪のような仕方である。このような発想がライプニッツに可能であったのは、現実世界の偶然的真理が無限に分析可能であった時の、1-Aで述べたような無限概念のおかげであろう。だがライプニッツには真逆のB. 非人間中心主義的側面がある。この側面は1-Bからすれば容易に理解できる。典型的には、無限に大きい神の宇宙においては人類総体レベルでの悪の優勢さえ、より大きな善のためになるという考え方が可能であることに見られる(事実ライプニッツはこの可能性を否定しないし、非叡智の被造物を含み込む「形而上学的でしかない善」という観念にも言及する)。ところでこの人間中心主義的/非中心主義的な二側面をライプニッツの新旧(スコラ哲学と新哲学)の思想潮流に対する八方美人で曖昧な態度とみなすべきではない。例えば非人間中心主義を帰結するような世界の無限の宏大さこそが、世界における無差別的均衡点(そこを中心に世界が量的質的に二等分されるような点)の不可能を導出し、神の善意ある決定の被造物に対する「傾けるが強い」現実的作用を説明しているのである。ライプニッツのこうした対立的二側面については従来から非難も好意的解釈も為されてきたが、いずれにせよ本研究のように無限概念との関連によってこれを解釈するものは、筆者の知る限りあまりない。

3. 現代的意義

筆者は無限概念を介して『弁神論』に見られる対立的な二側面を折衷しようと試みた。しかし折衷が可能なのはあくまで人間の他の存在に対する相当程度の優位性をドグマとして受け入れる時のみであることはやはり見過ごせない。ライプニッツの思想体系を理論的に拡張していく場合、細菌を見るかのように人間を観察するような、より大きく叡智的な存在者がいることには、世界の無限性を考えれば何の不思議もない。だがライプニッツは——寓話的にその可能性に触れこそすれ——そこまで思考を押し進めはしない。というのも彼が考えている創造主たる神は人間がその似姿であり、人間がその正義を共有できるような神だからだ。そして筆者の考えるにはこの神話的なドグマには、決定的な道徳的信念が付随している。それは神が何ら善意なく人間にも考慮することなく世界を創造したとすると、世界は必然的でしかなくなり、従って人間は怠惰になるというものである。要するに「乗り越えられない必然性(une nécessité insurmontable)は不敬虔の扉を開く」という信念だ。しかし人間を全く無差別に取り込むような自然の運命を受容しながら、道徳を思惟した哲学は、一神教(特にキリスト教)の外に目を向ければ幾らでもある。こうした指摘はもはや聖書の記述が自明ではない時代に、そして一神教と相容れないような文化圏に生きる筆者としては避けようがない。だがそれでも、この二側面を切り離しはせず、ライプニッツ哲学が両者をあくまで包摂していたことに忠実なまま、この哲学の研究することは、なお現代的な意義を有すると筆者は確信する。何故ならこの二側面は現代、世俗的な風貌を帯びて依然として我々の思考の特徴にも見いだされるからだ。

人間中心主義的な側面、つまり人間は神の推定意志に従って発展すべきだという一元的進化的志向(こうした特徴はカトリックよりもむしろプロテスタントに強力である)は、民主主義、資本主義とが技術革新を通してグローバル展開していくことに親しい——近年この潮流に変化があるにしても、この一元化/進化において生じるあらゆる悪は人類の発展という善によって帳消しにされるという特徴が、弁神論の構造から引き継がれている。ハイデガーがライプニッツを二進法と保険制度という技術的発見をもって取り上げ、彼が「技術への問い」を投げかける時、ライプニッツはこうした近代合理主義の謂わばパイオニアとしてみなされている。しかしながら何度も指摘する通りライプニッツには非人間中心主義的側面がある。それは一元論的な人類発展の図式に抗して生じた多元主義的な思想潮流に合致するし、あるいは動物の権利や環境哲学といった人間以外の存在を倫理の範疇に含めようとする思想にも通ずる。だがこの後者の側面はエスノセントリズムやナショナリズムにも容易に通ずる。そもそも伝統ないし習慣への盲目的な隷従からの脱出が、前者の側面の啓蒙的性質を惹きさせたのであった。つまり二つの側面は互いを批判しながら循環しているのである。従ってこの両方を内蔵するライプニッツ哲学にはなお現代的意義があるのである。现阶段では具体的なことまで提示することはできない。だが理由律を保持しかつ矛盾律を捨てないライプニッツ哲学は、「理由を問う」という形式の中で問われるところの最後の理由＝究極の理性を推定無罪として措定していることは明らかである。しかし同時に我々はその極限にまで辿り着くことが不可能だということにもなり、つまり常に誤り得るということだけが明らかになり、従っていかなる真理も暫定解としてしか受容できないことが分かる。しかしこれは否定的な意味を持つだけでなく、問いを止めることはできないという制約を人間に課すだろう。無限を軸にしたライプニッツ哲学の理解は、一元論か多元論かで択一的ではないような、むしろそうした思惟の傾向を包括するような次元に向かうように思う。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

丸山 諒士、「有限性の自覚と無限についての知」、『境界を越えて——比較文明の現在』17号、2017、77-90